

青梅市文化財ニュース

第334号

平成27年8月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

青梅市内にある遺跡の現状 その1

青梅市内にある遺跡については、平成17年12月の多摩川上流御岳地区から始め、平成26年11月の霞川下流金子地区付近まで10編にわたりご紹介してまいりました。

今回からは成木川沿いについてご紹介してみます。

成木川の源流は黒山くろやまの南東約1km付近にあり、北小曾木川（蜷沢えびさわ）や二本竹川、黒沢川と合流し、飯能市の加治橋上流で入間川と合流、さらに、さいたま市のJR指扇駅西方の国道16号線付近で荒川と合流します。成木川はほとんどが山間やまあいを流れているため、広大な台地は下流域に限られ、上流では狭い台地上に小規模な遺跡が点在しています。

N-1は高土戸たかつと遺跡と呼ばれています。川が湾曲し、成木川との比高17mほどの高台北側が遺跡となっています。現在、入母屋造りの家や土蔵など数軒の家屋が建ち、昔の風情を保っています。遺跡は山からの緩い斜面部分に該当し、現在は平地面積全体の2割ほどが耕作されているのみで、他は草原となっており、遺物の採集は困難となっています。地元の方が耕作中に収集した遺物によると、縄文時代早期後半（今から六千数百年ほど前）の土器のかけら数点と、縄文時代前期前半（今から六千年ほど前）の土器で、粘土の中に繊維が混ぜられて焼いた土器や縄文時代中期後半（今から四千年ほど前）の加曾利E式土器などのかけらが見つかっています。チャートという石を割ってそのかけらを石器に使った、使用痕のある石器も見つかっています。

N-2は久道きゅうどう遺跡と呼ばれています。北小曾木川との合流点から100mほど北に位置し、小規模の河岸段丘上が遺跡です。かつて市立第七中学校がここにあり、その校舎を建設する際、縄文時代中期後半、加曾利E式の土器が出土したという記録が残っています。現在は駐車場や体育館、青梅市立成木環境改善センターの敷地となっており、遺跡の面影は全くありません。

N-3は蜷沢えびさわ遺跡と呼ばれ、地図のとおり、まったくの山の中に存在する遺跡です。植

林される前には耕作もされていたと言われ、その当時拾った土器によると、今から五千数百年前の縄文時代前期後半諸磯期^{もろいそき}の土器が確認されています。

N-4は小中尾遺跡^{こなこう}と呼ばれ、一万二千m²に及ぶ舌状台地^{ぜつじょうだいち}となっており、その広大さは、市内では数少ない遺跡のひとつです。時代的にも旧石器時代から縄文時代早期、前期、中期、そして平安時代と広範囲にわたる遺跡で、現在でも表面採集による遺物の収集が出来ます。今まで発見した石器類では、旧石器時代に属する黒曜石で作られたナイフ形石器、縄文時代に使われていた矢じりや玦状^{けつじょう}耳飾り、そして多くの打製石斧等です。また、土器類では、縄文時代早期前半(今から八千年ほど前)の捺糸文土器^{よりいともん ど き}や早期後半の条痕文土器^{じょうこんもん ど き}、竹管文^{ちくかんもん}を施した前期前半の土器、そして中期前半(今から五千年ほど前)と中期後半の土器などが発見されています。他には、少し時代が空き、平安時代の須恵器^{すえき}等のかけらも採集されています。これ等の遺物は、古い時代の物については斜面部分に集中し、縄文時代中期になると東側の平坦部分に集中しています。また、この地域南端の傾斜地では湧水地が有り、南に位置する二本竹川まで行かなくても多少の水は供給することが可能となっています。地形図からしてもこの部分だけが浸食されており、当時の水供給源とは言い切れませんが、重要な水源となっていた事は間違いないと思います。

N-5は中里遺跡とよばれ、二か所に分けられます。愛染院南東の台地上に位置する遺跡では縄文時代早期後半の条痕文系の土器が採集されており、現在は梅の木を植え、地表は草原となっています。もう一か所は、安楽寺北方の埼玉県をまたいだ遺跡です。条痕文系の土器や縄文時代前期後半竹管文を施した土器、縄文時代中期前半と後半、後期前半の土器が採集されており、平安時代の須恵器や土師器も採集されています。現在は桃の木が百数十本ほど植えられ、地表は草原となっており、表面採集は不可能となっています。

(続く) 文責・鈴木晴也

